

直交変換

定義 3.8. n 次正方行列で、 ${}^tAA = A{}^tA = I_n$ を満たす行列 A を直交行列という (ただし、 tA は行列 A の転置行列を表す). 直交行列 A によって生成される線形変換 f_A を直交変換という.

定理 3.9. A を直交行列とする. このとき、直交変換 f_A は以下を満たす;

- (1) f_A は内積を保つ. すなわち、任意のベクトル \vec{v}, \vec{u} に対し、 $\langle f_A(\vec{v}), f_A(\vec{u}) \rangle = \langle \vec{v}, \vec{u} \rangle$ が成り立つ.
- (2) f_A は 2 点間の距離を保つ. すなわち、任意の点 P, Q に対し、 $P' = f_A(P), Q' = f_A(Q)$ とすると、 $|PQ| = |P'Q'|$ が成り立つ.

Proof. (1) ベクトル \vec{p}, \vec{q} を $n \times 1$ 行列 ($n = 2, 3$) とみなすと、内積 $\langle \vec{p}, \vec{q} \rangle$ は行列の積 ${}^t\vec{p}\vec{q}$ と解釈することができる. 例えば、空間ベクトル $\vec{p} = \begin{pmatrix} p_1 \\ p_2 \\ p_3 \end{pmatrix}, \vec{q} = \begin{pmatrix} q_1 \\ q_2 \\ q_3 \end{pmatrix}$ に対し、

$${}^t\vec{p}\vec{q} = \begin{pmatrix} p_1 & p_2 & p_3 \end{pmatrix} \begin{pmatrix} q_1 \\ q_2 \\ q_3 \end{pmatrix} = \begin{pmatrix} p_1q_1 + p_2q_2 + p_3q_3 \end{pmatrix}$$

となり、上式の右辺は 1×1 行列であるが、これを実数 (スカラー) と同一視すると、 $\langle \vec{p}, \vec{q} \rangle$ に等しいことがわかる. この同一視の下で、直交行列 A に対し $\langle f_A(\vec{v}), f_A(\vec{u}) \rangle$ を計算すると

$$\langle f_A(\vec{v}), f_A(\vec{u}) \rangle = {}^t(A\vec{v})(A\vec{u}) = ({}^t\vec{v}{}^tA)(A\vec{u}) = {}^t\vec{v}({}^tAA)\vec{u} = {}^t\vec{v}I_n\vec{u} = {}^t\vec{v}\vec{u} = \langle \vec{v}, \vec{u} \rangle$$

となり、 f_A が内積を保存することがわかる*⁵.

(2) 点 P, Q の位置ベクトルを \vec{p}, \vec{q} をすると、

$$|PQ| = \|\overrightarrow{PQ}\| = \|\vec{q} - \vec{p}\| = \sqrt{\langle \vec{q} - \vec{p}, \vec{q} - \vec{p} \rangle}$$

である. 一方、

$$\begin{aligned} |P'Q'| &= \|\overrightarrow{P'Q'}\| = \|f_M(\vec{q}) - f_M(\vec{p})\| = \|f_M(\vec{q} - \vec{p})\| \\ &= \sqrt{\langle f_M(\vec{q} - \vec{p}), f_M(\vec{q} - \vec{p}) \rangle} \end{aligned}$$

となり、(1) の結果より、 $|P'Q'| = \sqrt{\langle \vec{q} - \vec{p}, \vec{q} - \vec{p} \rangle} = |PQ|$ を得る. □

注意 3.10. 内積を保存する線形変換は直交変換に限る.

この小節の最後に、直交行列の性質を挙げておく;

*⁵ 2 つ目の等号は、積の転置の性質 ${}^t(AB) = {}^tB{}^tA$ を使っている.

直交変換の性質

A を n 次直交行列とする。このとき、以下が成り立つ;

- (1) A は正則行列である。
- (2) 行列式の値は $\det(A) = \pm 1$ 。
- (3) A の第 i 列を成分とするベクトルを \vec{a}_i ($i = 1, 2, \dots, n$) とすると、 $\langle \vec{a}_i, \vec{a}_j \rangle = \delta_{ij}$ が成り立つ。

直交行列の定義式から、 $A^{-1} = {}^tA$ なので、(1) は明らかである。

一般に、任意の正方行列 A, B に対し、

$$\det(AB) = \det(A) \times \det(B), \quad \det({}^tA) = \det(A)$$

が成り立つ。したがって、 A が直交行列ならば、

$$1 = \det(I_n) = \det({}^tA A) = \det({}^tA) \times \det(A) = \det(A) \times \det(A)$$

となり、 $(\det(A))^2 = 1$ を得る*6。

次に、直交行列が正規直交基底と関係があることを述べる。そのために、行列を「(列)ベクトルを並べたもの」とみる。例えば、行列 $A = \begin{pmatrix} a_{11} & a_{12} \\ a_{21} & a_{22} \end{pmatrix}$ は2つのベクトル

$\vec{a}_1 = \begin{pmatrix} a_{11} \\ a_{21} \end{pmatrix}$, $\vec{a}_2 = \begin{pmatrix} a_{12} \\ a_{22} \end{pmatrix}$ が並んだ行列 $(\vec{a}_1 \ \vec{a}_2)$ と見なすことができる。する

と、一般の行列 $A = (\vec{a}_1 \ \vec{a}_2 \ \dots \ \vec{a}_n)$, $B = (\vec{b}_1 \ \vec{b}_2 \ \dots \ \vec{b}_n)$ に対し、

$$\begin{aligned} {}^tB A &= \begin{pmatrix} {}^t\vec{b}_1 \\ {}^t\vec{b}_2 \\ \vdots \\ {}^t\vec{b}_n \end{pmatrix} (\vec{a}_1 \ \vec{a}_2 \ \dots \ \vec{a}_n) = \begin{pmatrix} {}^t\vec{b}_1 \vec{a}_1 & {}^t\vec{b}_1 \vec{a}_2 & \dots & {}^t\vec{b}_1 \vec{a}_n \\ {}^t\vec{b}_2 \vec{a}_1 & {}^t\vec{b}_2 \vec{a}_2 & \dots & {}^t\vec{b}_2 \vec{a}_n \\ \vdots & \vdots & \ddots & \vdots \\ {}^t\vec{b}_n \vec{a}_1 & {}^t\vec{b}_n \vec{a}_2 & \dots & {}^t\vec{b}_n \vec{a}_n \end{pmatrix} \\ &= \begin{pmatrix} \langle \vec{b}_1, \vec{a}_1 \rangle & \langle \vec{b}_1, \vec{a}_2 \rangle & \dots & \langle \vec{b}_1, \vec{a}_n \rangle \\ \langle \vec{b}_2, \vec{a}_1 \rangle & \langle \vec{b}_2, \vec{a}_2 \rangle & \dots & \langle \vec{b}_2, \vec{a}_n \rangle \\ \vdots & \vdots & \ddots & \vdots \\ \langle \vec{b}_n, \vec{a}_1 \rangle & \langle \vec{b}_n, \vec{a}_2 \rangle & \dots & \langle \vec{b}_n, \vec{a}_n \rangle \end{pmatrix} \end{aligned}$$

となるので、 A が直交行列ならば、 ${}^tA A$ の (i, j) 成分は $\langle \vec{a}_i, \vec{a}_j \rangle$ 等しく、 ${}^tA A = I_n$ であることから、 $\langle \vec{a}_i, \vec{a}_j \rangle = \delta_{ij}$ を得る。

*6 直交行列ならば、行列式が ± 1 となるのであって、 $|\det(A)| = 1$ だからといって A が直交行列とは限らないことに注意せよ。たとえば、せん断を定義する行列 $\begin{pmatrix} 1 & a \\ 0 & 1 \end{pmatrix}$ は $a \neq 0$ のとき直交行列ではないが、行列式の値は1である。

3.2 平行移動

定義 3.11. ベクトル \vec{v} に対し, $\vec{p} \mapsto \vec{p} + \vec{v}$ で定義される変換を \vec{v} 方向への平行移動とい
い, $f_{\vec{v}}$ と書く (つまり, $f_{\vec{v}}(\vec{p}) = \vec{p} + \vec{v}$).

注意 3.12. $\vec{v} = \vec{0}$ のとき, $f_{\vec{v}}$ は恒等変換 I_n である.

定理 3.13. 平行移動 $f_{\vec{v}}$ は以下の性質を満たす;

- (1) $\vec{v} \neq \vec{0}$ のとき, $f_{\vec{v}}$ は不動点を持たない.
- (2) $f_{\vec{v}}$ は 2 点間の距離を保つ. すなわち, 任意の点 P, Q に対し, $P' = f_{\vec{v}}(P), Q' = f_{\vec{v}}(Q)$ とすると, $|PQ| = |P'Q'|$ が成り立つ.

3.3 合成変換と逆変換

3.3.1 合成変換

平面における鏡映と回転

アフィン変換

3.3.2 逆変換

3.4 線形変換の固有値と固有ベクトル